

## スポーツの底力を今

日本メディカルスポーツ協会・林諄代表理事

新型コロナウイルス感染症との闘いは長期化の様相を呈しています。このような逆境の時こそ、人々に勇気と希望をもたらすスポーツの真価が問われます。医療従事者のための野球大会「ジャパンメディカルリーグ」を主催する日本メディカルスポーツ協会の林諄代表理事（株式会社日本医療企画社長）のスポーツへの熱い思いとは——（「日本医療企画社内報8月号」より抜粋）

私は幼少期からあらゆるスポーツに挑戦してきました。陸上、野球、相撲やバレーボールなどに取り組んできました。スポーツを通じて、体力や精神面を鍛え、仲間たちとの友情やチームワークなどを育み、多くのことを学びました。さらに、負けた時の悔しさや勝つ喜びといった、酸いも甘いもたっぷり味わうことができましたと思います。

コロナ禍のような危機的状況だからこそ、野性的本能が刺激され、スポーツのような勝ち負けを競うものをやりたがるのは、人のもつ本性なのかもしれませんね。世の中がパニック状態になると、一般的には「スポーツをやめよう」といった風潮に陥りがちです。しかし、そうした逆境に向かっていくことこそがスポーツ精神の真髄だと考えています。なぜならばスポーツのもつ高揚感が精神面にもたらす影響は大きく、逆境の中で一番力がでてくるものだからです。

スポーツは人生そのものだと思います。スポーツは体力がないとできません。闘争心や協調性、精神的な強さも求められます。つまり、人生に必要なものの多くを学ぶことができます。だからこそスポーツ界で語られる言葉は私たちの琴線に触れるのでしょうか。例えば、ラグビーの「One for all, All for one」といった言葉は人生だけでなく、会社の経営にも当てはまる言葉だと考えています。

逆境のこの時代においてスポーツマンこそが先導して、新たなチャレンジを行うべきです。日本メディカルスポーツ協会の活動は、チームスポーツを行うことでチーム医療に良い影響を与えることに繋がるとの考えに基づいています。今後は、ゴルフやテニス、駅伝なども開催したいと考えています。スポーツを通じ、医療界に希望と勇気と力を与えられる大会にしたいと思います。